

博士（人間科学）学位論文 概要書

顔の性別認知における肌色の作用

～日本人大学生の男女合成顔を用いて～

Effects of skin-color of gender cognition on face

! with composite faces of Japanese university students !

2005 年 1 月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

山田 雅子

Yamada, Masako

研究指導教員：齋藤 美穂 教授

我々は無意識のうちに顔という対象を抽出する。抽出されたそれは秒単位の時間もおかず性別というラベルを付けられる。何気なく行なわれる認知の一過程であるが、この過程に極めて社会的なジェンダーという枠組みを探ることもできるのではなからうか。ここで注目されるのが肌の色である。

女性に向けられた「色の白いは七難隠す」という言い回しの存在、昨今の美白化粧品市場の市場拡大等、女性と色白肌とを結び付ける事例は枚挙に暇がない。逆に男性が色白である場合には「弱々しい」と揶揄され、「女の子だったら」等という言葉が漏らされることもある。また、好んで日焼けをする男性も多い。ここには明らかに男女で非対称の肌色観が存在する。それは生来の肌色の性差の範囲に留まらないといえよう。

本研究ではこのような肌色の性質に着目し、顔の性別認知におけるその作用に迫った。日本人の顔では眉や輪郭が性別判断に利用されていることが指摘されているが（Yamaguchi *et al.*, 1995）、ここに肌色が影響している可能性はないのであろうか。本研究においては7実験を構成、種々の顔に対する性別判断（二者択一課題）、性別印象評定（一対比較法、段階評定）の傾向を抽出した。論文中に目的として掲げた三点に沿い、以下に概要を紹介する。

### (1) 顔の性別認知における肌色の影響の解明

予測された通り、肌色は性別判断、性別の印象にステレオタイプ的な影響を及ぼした。当該の影響には顔の形態的な条件が付随し、そうした形態的な条件は課題によって異なることも明らかとなってきた。

まず性別判断では物理的特性として男女のパターンが拮抗する合成顔において肌色の作用が顕著となった。この場合には同じ顔形態であっても色黒肌において男性判断が上昇し、色白肌において特に女性判断に傾くといえる。また、顔の観察時間が著しく短い場合には肌色による判断の差異が顕著に見られたことから、形態に基づく判断が困難な場合において特に肌色の作用が強まると考えられた。換言すれば、形態的な曖昧性が肌色の作用の要件となるともいえる。

一方の性別の印象評定では、男女どちらかのパターンが明確に優勢となる形態において肌色による印象変化が生じ易い可能性が得られ、更に男性的形態ではより色黒に、女性的形態ではより色白に見られるという逆方向の作用も抽出された。

### (2) 顔の性別認知のメカニズムにおける肌色の導入

前項のような肌色の作用条件の違いは性別判断と印象評定の処理の独立性を示唆す

る。Sergent（1986）は低空間周波数成分の情報のみでも顔の性別判断は可能であると報告しているが、全体的な布置情報を利用してまず大まかなカテゴリ分けがなされ、この段階で明確な分類が不可能であった場合に肌色のステレオタイプが参照されることも推測された。総じて、肌色は性別判断に対して補助的に機能する一方、印象においては構成要素の一つとなっていることが考えられた。

また、判断された性別によってジェンダースキーマが活性化する可能性についても指摘した。男性像と女性像については肌色と印象との関係が強く結ばれ、スキーマとして整理されている一方、判断が難しい顔については肌色に関する情報が十分に蓄積されておらず、肌色の作用が顕著とならないことも考えられた。

男女の顔の合成比率を操作した実験では、一方の顔パターンが 3/4 以上含まれていれば性別判断が安定することが確認され、これ以上に片方の比率が高まった場合、性別の印象の変化は過小視される傾向が見られた。こうした傾向より、物理的に規定される情報がそのまま心理的な評定に反映されるのではなく、より効率良く安定的に性別を判断するために調整されていることが推察された。

### (3) 認知傾向に基づくジェンダーの再考

前述の認知傾向を支える要因として視覚的に経験された情報の蓄積を想定した場合、摂取される視覚像として第一に挙げられるのは実際の男女の肌色である。本研究では、アンケート、実測結果共、男性はより色黒、女性はより色白という傾向を示した。また、好ましい肌色は男女で明らかに異なり、女性に対して色白肌を求める意見が特に多く抽出された。女性の肌色は印刷物において赤み寄りかつ高明度で再現されているという報告があるが（柳瀬ら、1970）、好ましいとされる肌色にまず性差があり、その社会的通念を強化するかたちでメディアによる視覚像の提供がなされ、更にその像が模倣されることによって一層の強化、定着がもたらされることが推測された。

以上のように、肌の色は性別の認知に深く関与し、その作用の方向性は従来のステレオタイプをなぞるものであることが把握された。また、その背景には男性は色黒、女性は色白という確固とした社会的通念が存在することも捉えられた。当該の影響が嗜好、評価という段階ではなく、性別の認知というレベルにまで及んでいる可能性こそが本研究において指摘すべきところであると思われる。